

## 広池千九郎研究

——「最高道德の格言」研究序説——

### 目次

井出元

はじめに

- 一、「最高道德の格言」の特質
- 二、広池千九郎の道德教育と「格言」
- 三、「道德科学の論文」第二卷の成立
- 四、「最高道德の格言」の編纂過程
- 五、今後の課題

はじめに

広池千九郎（一八六六—一九三八）が道德教育に携わり、また儒教、仏教、神道、キリスト教などに關心を抱いたのは、その青年期にまでさかのぼり得るが、「道德科学」（モラロジー）という新たな分野の研究に着手したのは、大正七・八年のころである。いかえれば、青年時代より培ってきた二十余年にわたる道德研究と教育者としての経験が、広池をして「新科学」としての「道德科学」という領域の開拓に傾注させたのである。広池は当初（大正時代）、この研究を「モラルサイエンス」と称し、その研究課題について次のように記している。

モラルサイエンスにては、凡そ二つの目的を有しております。第一は、古來人類の実行してきた道德の権

威を科学的に証明して、道德実行の効果を明らかにすること。第二は、古来の聖人または各宗教の祖師の  
 実行したところの最高道德を一般民衆に向かつて、これを科学的に説明して、一般民衆にその実行を促す  
 ことであります。<sup>1)</sup>

これは、広池が長年の教育活動、救済活動を通じて育んできた問題意識である。第一に「道德実行の効果に關する科学的証明」、第二に「最高道德の科学的説明」。前者は道德実行の必要性を説くことであり、この部分こそ広池の学者としての本領を示すものである。また後者は、道德の内容と実践の具体的指針を示すことを目的としている。「科学的説明」とは、道德の内容を誰にも実践できるような形で提示することである。このことに関して  
 は実践の指針を示すものとして、「自我没却の原理」、「神の原理」、「義務先行の原理」、「伝統の原理」、「人心の開  
 発救済の原理」の五つの原理を提示し、その他数多くの訓示や格言を示している。この二つの課題は、広池にと  
 って生あるかぎり探求しつづけられ、また今日においても継続して研究しつづけなければならないものである。

この研究においては、主として第二の課題に注目したい。道德の内容を具体的に示すということは、道德が実  
 践を眼目とする以上、最も重要な課題である。この点についての広池の配慮には周到なものがあり、その最も力  
 を注いだのが漢字八文字より成る「最高道德の格言」の考案である。そこで本稿においては「道德科学の論文」  
 第二巻に収められた「最高道德の格言」研究の序説として、その形成の経緯と「格言」の全貌を明らかにするこ  
 とを主題とする。

### 一、「最高道德の格言」の特質

#### 「道德科学の論文」第二巻の意義

青年時代より教育界に身を投じ、また社会人を対象とした教育に尽力した広池は、終始一貫して道德教育を重  
 視してきた。昭和三年（一九二八）に刊行された「道德科学の論文」は、その道德教育への使命感の結実したも  
 のであり、学者として、また救済者として全霊を注いだものである。

「道德科学の論文」は、第一巻「因襲的道德及び最高道德の原理及び実行に対する科学的考察」、第二巻「最高  
 道德の大綱」から構成され、その内、第二巻に「最高道德の格言」百四十条が収められている。その後の著書の  
 中に記されたもの、および未収のものをあわせると、広池は二百余条の格言を考案している。しかし、これらの  
 中で中国の古典よりそのまま引用しているのは、「天爵を修めて人爵これに従う」（孟子）、「意なく必なく固なく  
 我なし」（論語）、「積善の家には必ず余慶あり」（易経）の三条のみである。その他はすべて広池によって考案さ  
 れたものである。

広池が格言を考案し、体系化した経緯を考えると、その作成に困難を極めた跡をうかがうことができる。第一  
 に、その草稿の量である。第一原稿より数えて実に十四種の草稿が残されている。第二に、その八文字に集約さ  
 れた豊富な内容である。ひとつひとつの格言の背後にある広池自身の体験と学識の量は、筆舌に尽しがたいもの  
 がある。第三に、各格言の響きの良さである。もともと漢学の素養を有するといえ、一度聞いたら即記憶に留  
 まってしまうほどに洗練されたものである。「格言」は広池の道德実践に賭ける情熱と信念の表れであり、その体  
 験と学識の結実したものである。そこで、まず「第二巻」編纂の意義について考えていこう。

広池は「格言」を考案したこの意味についてつぎのように述べている。

現代の我々が真に最高道德を実行しようとするには、何としても右のごとき冷たい角のある、且つ小さな  
 理論だけであるものではないのです。万一これのみによる時は、日々湧起する所の実際問題のために、

自己の頭脳と神経とは忙殺され、最高道德の実行はかえって苦悶、紛争、疾病、短命ないし不運を持ち来  
たす媒介となり終わるので<sup>(2)</sup>。

この文のなかで言う「右のごとき冷たい角のある、且つ小さな理論」とは、一般に言われている道德論を指して  
いる。たとえば「人の為に尽くす」とか、「国を愛する」とか、「親を大切にする」などの類であり、また儒教流  
の徳目主義の道德論である。これらはもとより重要な内容を含んでいることはいまでもないのであるが、実践する  
側に対する配慮に欠けるというのである。説教による道德教育は、ともすると高圧的となり、本人を萎縮させ、  
あるいは反発を招く結果になりやすい。また徳目主義の道德は、その実践の方法に苦慮するであろう。そこで、  
世の中の道德教育に携わる者を評して「道德教育の目的は、未だ道德的ならざる人々を教育するにあるのです。  
今、世の道德家の多くは、従来の道德の実行を必要とする多くの人々に真に諒解、実行さるるよう<sup>(3)</sup>に道德を説か  
ずして、人格完成せる聖人に相応しい道德を説いておるのであります。この間の消息を深く顧みる時は、世の多  
くの道德家が、いかにあわれむべき一般人を救済せんとする慈悲心に乏しいかが推察されるのであります」と述  
べている。高度なレベルの道德はともすると人を打ち、また自身自身を責めてしまう。道德教育が人を頑なにし、  
また孤高を誇るようなものとなってしまうのは何の意味もなくなってしまう。そこで広池は、さらに続けて次の  
ように述べている。

ここにおいて、私はつとに宗教を信じ、且つこれに加うるに世界各国における神格者、聖人および祖師の  
最高道德実行の動機、目的および方法を調査して、最高道德実行の根本原理、根本理由、根本精神、帰着  
点、注意条件を収集、調査して見たのであります<sup>(4)</sup>。

この資料は大正十二・三年と推定されるので、文中の「宗教」とは神道、仏教、キリスト教などを意味すると同  
時に、具体的には明治末よりかわりのあつた天理教の信仰をいう。「最高道德実行の根本原理、根本理由、根本  
精神、帰着点、注意条件」とは、後節で紹介するように「格言」の体系の柱である。最高道德の根本をなす原理、  
それを実践しなければならない理由、実践の基本的な精神、実践の結果到達する境涯や人生、そして実践のため  
の注意事項と実践の指針である。道德の美点は何人も認めるところであろうが、日常生活のなかで具体的にとど  
ような心をもって何をなすべきなのか、そして、その結果どうなるのか。このことはだれもが知りたい問題であ  
り、道德が現実社会における実践を主眼とするものである以上、最も切実な問題である。

このような意図に基づいて「格言」が考案されていったのであるが、それは机上でなされたものではなく、あ  
くまで自分自身の体験を通して提出されたものでなくては生命を有さないものであつた。そこで、「聖人の教訓と  
実行、すなわち聖徳と余の経験とは一致す。而して余の見るところにては、この四つは、現代の科学の結論と一  
致するように考えられるのである。そこで、第一巻は余の研究であつて、第二巻は、その研究と一致する余の信  
仰の記述である」としている<sup>(5)</sup>。「第一巻」とは、先に述べたように道德実行の効果に関する研究であり、「第二巻」  
は、その実践論である。「道德科学の論文」に示された最高道德の実践に関する記述は、強い信念に基づいた広池  
自身の絶え間ない日々の精進の賜物なのである。ならばこそ、「学識、経験および思慮、およびその人の先天的も  
しくは後天的道德感などの卓越した人であれば、第二巻だけで最高道德の説明は足りるのである」としつつ、現  
実の人々の生活態度や精神生活の実態に鑑みて「広く人々を首肯するには、現代の人間に最も信用を受けつつ  
あるところの科学の証明によらなければならぬ」と考え、そこで、「第一巻の研究が必要となつた」と述べて  
いる<sup>(6)</sup>。したがって、

高き学力を有し、経験に富み、思慮深く、而して且つ道德感の強きお方は、第二巻だけご覧下されば、明

白に最高道徳についてのご了解はできるはずである。<sup>(7)</sup>  
 としている。いかに実践ということを重視していたかが知れる一文である。

広池千九郎の道徳実践と「格言」

広池は常々「最高道徳の試練」ということを述懐している。たとえば、「モラルサイエンス」が形作られるまでの経緯を述べたのち、「ここに到達せる経路に至っては、一朝一夕の事ではなくして、多年一九〇九年より今日まで、幾多の曲折を経たるのみならず、口にも筆にも尽し得ぬほどの精神のおよび物質的困難を経て今日に及んだ」と述べている。<sup>(8)</sup>一九〇九年、すなわち明治四十二年とは重病の中、苦悶しつつ精神の安らぎを求めて宗教の信仰を得ようとし、具体的には天理教の信徒となつて、教理の実践に精進するきっかけを得た年である。そして、その間に遭遇した多くの困難に對して、それに処する「一つ一つの精神作用と実行とが、最高道徳の試練であつたので身親から最高道徳を行なうことが出来、その結果がモラルサイエンスの学理となり、また最高道徳の百余箇条の教訓となつた」としている。<sup>(9)</sup>「百余箇条の教訓」とは、本稿で考察するところの「最高道徳の格言」である。

そこで、格言の性格を考えるために「広池千九郎日記」をひもといてみよう。たとえば、大正元年十月十五日の「日記」に自分の考えを記した後、「昨夜、懺悔の結果は、善念純真、善力精進の二句に帰結せしめて、今日より行はずなり。この句をもつて予の将来の心使いに致します」と記している。<sup>(10)</sup>さらに大正四年四月十一日の記事には「慈悲寛大自己反省」の格言が見え、また大正五年八月十四日には「忠実努力而不要求、是即神明之本性、我人之主義」とある。<sup>(11)</sup>これらの記事から知れるように、「格言」は広池自身の心の支えであり、またその時々における実践の指針であつたのである。

そして、「格言」が「最高道徳」の内容として編纂される場合、その「格言」のすべてが、自分自身にとつての実践の指針であることが大切であつたし、また表現は自身が考案したものであつても、その内容は、あくまで「世界諸聖人」の言行に倣うものでなければならなかつた。そこで、

第二巻は、世界の諸聖人の受けたる天啓およびその教訓、ならびにその実行の事跡を考察して、その一貫せる最高道徳の内容および実質を抽象して記述せしものであつて、これまた一毫も余の私見を交えた所はないのです。殊に最高道徳の条件百箇条は、余が一九〇九年（明治四十二年）以降、今日（一九二六年）に至るまで、親しく実行して経験を重ねたるものにして、毫末の点も空論なし。これ深く読者に了解していただきたい所であります。<sup>(12)</sup>

とあるように、「私見を交えず」というところに、格言が生命を有する理由があつたのである。聖人と称される人の言行は神の心を具現したものであり、聖人を介して神の心を体得しようとするところに広池自身の修養の眼目がある。よつて、格言の考案は広池の手に成るとはいえ、その内容はすべて聖人の言行を示すものでなければならなかつたのである。したがつて、

この最高道徳に関する諸項目は皆ことごとく世界諸聖人の教説・教訓およびその実行上に一貫するところの道徳の最高原理でありまして、一毫の微といえども私の意見を交えたところはありませぬ。すなわち本書に記するところのいわゆる最高道徳の原理は、私がかくのごとく最近二十年間にわたりて幾多の紆余曲折の困難の中を経過する間に、「この場合はいかなる方法を採用すれば神の心に適うか、聖人の教えに適うか、且つ現在の困難を無事に切り抜け得らるか」と考慮し、且つこれを実行して得たところの実地の経験の結果を、将来世界の人類に開示して、これを開発もしくは救済せんがため造り出したところのものであります。

と述べているのである。<sup>14)</sup>

このことから、「最高道徳はいかなる場合でも、真に自分の助かる事、すなわち幸福になることを目的とするので、他人とか、社会とかいうことを眼中に置くことなしに、すべてを思考し、決断し、実行するのです。真に自分の幸福になることならば、他人と社会とは自分より前に幸福を享くようになっておるからであります。すべてこの最高道徳の各項目、約百か条の意味でも、皆こういう心持ちにて解釈するのです」と、その読み方を示していることの配慮が理解できるであろう。<sup>15)</sup>

—このような背景と配慮とに基づいて、最高道徳の実践に志す人々のためにその指針を考案したのであるが、それは「この最高道徳を体得せんとする人の記憶に便ならしめんがため」ということが大切な課題であった。記憶に留めるということを経ではじめて、我々は事ある毎に自己を顧みることができ、事に当たったの方針も思案できるのである。そのためには、数多くの指針を覚え易いかたちで示すことが肝心であった。この数多くの格言ができるまでには実に長い間の苦心がある。この点については後に紹介するが、広池自身も「一時にできたものはなく、長い年月の間に漸次に成り立ってきたものである」ことを強調している。<sup>16)</sup>

以上、「最高道徳の格言」の特質を考えてきたが、次に節を改めて広池の道徳教育の中で、「格言」がどのように用いられているかを考察しよう。

## 二、広池千九郎の道徳教育と「格言」

### 初期の道徳教育

広池の道徳論の中で、実践の指針を示すにあたって格言が多用されている。それは一に記憶に便利であるためであり、さらに、その数の多きことは、日常茶飯のあらゆるできごとに対応させようというところに、その主眼がある。そこで広池の道徳論の中で格言が使われる経緯をみていこう。

広池の道徳論の中で『新編小学修身用書』は、その初期の形態を示すものである。この書は、小学校の二年生から四年生を対象とした教授用のテキストである。明治二十一年（一八八八・二十二歳）に発行され、三冊から成り、各冊五十か条の格言と、それに対応した事例が掲載されている。それは道徳教育を一方的な説教の範囲から脱して、一つの理論として構築し、児童生徒に自主的に、自覚的に行動させようというところにその眼目がある。ここに広池の道徳教育に対する考え方の特質をうかがうことができる。このことについては、すでに論じたことがあるので、<sup>17)</sup> 詳述は避けるが、事実を示して生徒に国民としての自覚を高めるといふ事を眼目としたものである。そして、引用された事例を通して生徒は道徳実行の必要性を自覚すると同時に、道徳の内容をはっきりと記憶することを課題としている。たとえば、同書第一巻を見てみよう。

吾身栄えるに至るも人の恩を忘るべからず。

人に敬わるるは人を益するより来たる。

人は老いても学ぶべし。

人は富貴なるも儉約すべし。

人は正直なるべくまた温和なるべし。

人は頓知を養うべし。

境にある物は他人に譲るべし。

人を思うこと己を思うがごとくすべし。

遊戯を知らざるは恥にあらず。

人を待つには誠をもつてすべし。

人は分に応じて孝養を尽し得べし。

よく働きよく楽しむべし。

富は勉強にあり。

父母のためには艱難を辞すべからず。

孝子は人の恵みあり。

知りたることは人に教うべし。

我を護りたまは君なり、その恩忘るべからず。

人の見ざる所にも悪しき行いはなすべからず。

一文の貯えも久しく積めば大金となる。

以上、第一巻の主なものを引用したが、これを音読してみると、これらの言葉のもつ響きの良さに気付く、さらに修身という範囲が極めて広いことに気付くであろう。また第二巻、第三巻には次のような言葉が掲載されている。まず、国民としての自覚をうったえるものとして、「一片の工夫よく閭村の富を致す」・「人は天に代わりて厚生利用を図らざるべからず」・「平素事物に意を注ぐ人は世の進歩に後ることなし」・「実に世を益する心ある者は富めども奢らず」・「世間の便利は工夫の母より産まる」・「世に生まれて益なき者は禽獸に劣れり」・「協力の至るところ金石を堅しとせず」・「私の怨をもつて公けの益を害するなかれ」・「自国を思うの精神は自己を重からしむ」・「人民幸福の進歩は発明の力による」・「良法善規はよく事業を全からしむ」・「真正に世の福利を祈らんと

せば、視聴の二官を忽にすべからず」とあり、学問の大切さについては、「知識に男女なし事物の発明は人を限らず」・「定見ある者は流行に流されず」・「書を読むは事理を解せんがためなり」とある。また人生の態度として、「艱難と戦うて勝たざる者は真の勇者にあらず」・「泰山は一貫石の多きなり、千金は一厘銭の集まりなり」・「艱難の荆棘は熱心の火に焚かるべし」・「行いに昼夜明暗の別あるべからず」・「活発なる気象ありて後、活発なる利益を得」・「嘉言善行を聞見して身に行わざるは、能書を読みて業を服せざるがごとし」・「事の成功は不屈忍耐の後待つべし」・「過あるも善くこれを改めば幸福を得るに至るべし」・「身の移動に困りて志を変ずる者は小人なり」・「真正の勇氣は義人の脳裏に住む」・「善く積み善く散ずるを真の理財者とす」・「実着に事業を励む者は富貴名譽共に至らん」とあり、親に対しては「父母の己を愛せし心を心として父母に事つべし」・「終身孝を尽くすも父母の恩に対して足らざるところあり」・「至孝の者は我身の憂苦を知らず」・「孝は百行の基なり」・「親に事えて孝なれば自然に福あり」・「よく親を養い、またよく親を安んずべし」とあり、道徳実行の効果を説いて、「正直の者は自然に福あり」・「善を行えば善報あり」・「事の成否は志の厚薄にあるのみ」・「誠心の到るところ事の成らざるはなし」・「招かずして来るの禍なし」・「成功は苦勞の結果なり」とある。さらに、

己を利せんと欲せば、まず他人を利すべし。

兄弟は相愛し相保つべし。

朋友の信義は難苦の時に見るべし。

人の幼稚は白紙のごとし、善悪染んで洗いがたし。

他人を頼むは己を亡ぼすの初めなり。

仕官は国益を図るの意より望むべし。

度量狭き者は大事を成すに足らず。

天子の恩は死に至りても忘るべからず。

寸思は尺報すべし。

人我に背くとも我人に背くなかれ。

楽歳に凶年を思ふべし。

人の親睦は神の企望なり。

愚者と争えば己もまた愚なり。

賢者は危に近づかず、また人を愛す。

国民たる者は大義名分を誤ることなかれ。

これらの格言も一度音読してみると、幾つかの格言は、その場で記憶に留まる。音読しながら「なるほどもつともだ」と感じた格言は精神的に体得するとまではいかずとも、ひとまず脳裡に留めることが大切である。また、このように数多くの格言を用意しているのは、日常茶飯のできごとに、できるかぎり対応させようという配慮である。時と所とに応じて実践の指針をしめすことが、道徳教育に携わるものとしての大切な配慮である。

そして、同書の序文のなかに「書中の格言は強ち古人の語を用いずして、児童の解し易きものを撰びたり。且つ類別をなさざるは類別するの実益少なきを見ればなり」とある。この配慮もまた重要である。とくに「類別」をしないというのは斬新な考えである。当時の修身のテキストは「忠君」、「愛国」、「孝行」などの項目によって、教訓が類別されて編纂されている。しかし、広池はその「類別」は実益が少くないというのである。まことにもつともである。なぜならば、我々が自分の生き方を顧み、また事にあたつての方針を定める場合、かならずしも自

己の行動を類別することはない。実生活は複雑多岐にわたっており、その行動もまた類別して決するものではない。親に対する行為は国家を愛する心と切り離されるものであつてはならず、社会のための活動が親に心配をかけるようなことがあつてはならないのである。そのためにこそ、数多くの生き方を心得ておくことが重要であつたのである。数が多ければ、おのずから覚え易いということが重要となってくる。ここに簡潔な表現をもつて百五十の格言を用意した理由がある。はっきりと記憶に留めるためにはできるだけ簡潔に道徳の内容を示すことが必要である。しかし「忠君」、「愛国」、「孝行」という簡潔さではない。日常における一挙一動の指針になるような形で示し、まず記憶に留めさせることが肝要であつたのである。

また、当時、小学校の一年生に対しては「修身書外編」というテキストを編纂しようとしているがこれは現在に至るまで公刊されることはなかった。その内容は「高きものは富士の山なり、大なるものは親の恩なり」・「箸も三本合すれば折れず、兄弟も力を合すれば強し」・「己の身の丈伸ぶを見、父母の命の縮まるを知れ」・「蓄のとき枝を折れば花咲かず、幼きとき学校に来ねば字を知らず」とある。これらは全部で五十五か条用意されているが、上の句によって注意を喚起し、下の句を自覚させようとしたものである。たとえば「親の田畑において働くを思い、子供は学校にて励むべし」・「田植えは雨降りをいとわず仕事をなす。学校に来るものも風雨を避けるな」とある。仕事に打ち込む親の姿を知ること、そして、その目の当りに見た事実から学校で学ぶということの大切さを自覚させようというのである。短い文章であるということの利点は、なによりも覚え易いということである。

以上、青年時代の道徳教育のなかで、すでに格言が重要な位置を占めていたということを紹介したが、学校教育の理念を表すものとしては、大正二年に提示した「天理中学教育主義」がある。それは「慈悲寛大」と「自治

自修」という二句に要約されていた。これらの内容はことあるごとに繰り返し説明されている。先生の生徒に対する態度として「慈悲寛大」が、また生徒の態度として「自治自修」が説かれるのである。このことについては拙稿「広池千九郎の教育理想」を参照されたい。<sup>(18)</sup> また、社会教育としては、工場救済（労働問題の道德的解決）として、「慈悲寛大自己反省」・「順応同化絶対服従」・「忠誠努力而不要求」の三格言を掲げ、さらに大正七年の書簡の一節に「最高最大の道德心即ち慈悲寛大自己反省、順応同化絶対服従、忠誠努力而不要求」という表現もある。これは文書による救済活動の一端であり、当時、広池が信条としていた道德の内容を示すものである。これらの格言の内容については別稿として改めて論じる。

さらに「最高道德の格言」の前提として、大正十一年ころには「道德標準比較表」と称するものを考案している。<sup>(19)</sup> この「比較表」は「道德」の三つのレベルを示すためのものであり、以下のごとくである。

上……………最高道德すなわち神仏聖人及び各宗祖師の行うところにて、救われる、仏教にて悟りを開く、キリスト教にて救われる、御道にて助かることなり。

中……………普通道德すなわち御道にていわゆる八埃、キリスト教にていわゆるスイン、仏教にていわゆる迷いの凡人。

下……………罪惡。

これはのちに「最高道德」・「普通道德」・「不道德」という概念で説明されるものの初期のものである。これらは直接には「格言」とかかわりないが、そこに掲げられている二十二項目の内容は、「道德」の内容を合理的に説明しようとして編纂されたものであるというところに、「最高道德の格言」の編纂と通ずる点がある。二三例をあげてみよう。たとえば、

上……………慈悲寛大自己反省すなわち御道の「たんのう」。

中……………偏愛・執着。

下……………同情・親切・義侠心無く、正邪を論せず、自己に利益あるもののみを愛す。不正義をもって正義上の者を撃つ。

その解説として、さらに、

上……………自分善をなし、迫害せらるるも、自己の不徳を反省して、慈悲寛大をもって相手を遇す。

中……………自分善をなし、他に迫害せらるることを怨み怒るもの。

下……………自分悪しくして罰せらるることを怨み怒るもの。

とある。また

上……………順応同化絶対服従。

中……………自己の自由意志と正義権利を標準として進むもの。

下……………放縱・横暴・奸罪を極めるもの。

上……………忠誠努力而不要求（忠誠努力して要求せず）。

中……………報酬本位。

下……………怠惰・怠業・ストライキ。

上……………救済人心而積陰徳（人心を救済して陰徳を積む）。



中……………自主独立。  
下……………乞食根性。

など、合計二十二項目にわたって道徳のレベルを一覧できるような表を考案しているのである。そして、最後に「その結果」として、「上……………幸福」、「中……………成功」、「下……………失敗滅亡」とあり、さらに表の最後に「上中下ともに苦勞あることは同一なり。ただ最後の結果は異なるのみ」と記している。

このように実践する立場に立って、その実践の指針を示していくというのは広池の使命とする所である。かつて小学校の児童のための道徳のテキストを編纂した場合と同様である。分かりやすく、覚えやすいということが第一であり、その上、実践しようという意志のあるものに対する配慮を伺うことができる。すなわち、「右、中の人に対しては上の道徳を行えど下の人に対しては中の道徳を行えば可なり。これに対して上を行う時は先方も滅亡して我が身もまた滅亡すべし。如何なる場合も心の中には慈悲寛大自己反省の精神を持たざれば、自己の損失となる」とある。この注意書きは、我々が見逃すことのできない、教育者としての配慮であり、これもまた、教育者、救済者としての慈悲の表われであり、「最高道徳を合理的に説明する」という広池の課題の成果のひとつである。以上のことから、「天啓は万古不易の天理の宣言なり。これを時と處とに応じて適用する方法を示し、人をして幸福を得しむるものは、モラルサイエンス（すなわち知識学問）なり」という言葉を味わい得るであろう。<sup>20</sup> また当時は「注意十六則」・「注意三十六則」・「注意四十則」などと称する格言を考案している。<sup>21</sup> これもまた広池の考案した道徳実践の指針を示すものであり、以下のごとき内容である。

一、天理を守らざる者は滅ぶ。

二、陰徳を行わざる者は滅ぶ。

三、神仏を信ぜざる者は滅ぶ。

四、再生の道を知らざる者は滅ぶ。

五、大恩を忘れる者は滅ぶ。

とあり、さらに「常に相手の欠点を発くものは滅ぶ」・「環境に順ぜざるものは滅ぶ」・「常に反抗心を有して反動的行為を恣にするものは滅ぶ」ともある。人間のもつ欠点を鋭く指摘したものであり、簡条書きの箴言という類いであるが、その厳しきの背後に、実践する側に立った配慮を窺う事ができる。これもまた、簡潔な表現を用いて記憶に留めるということを主眼としているのである。

ここに紹介した二つのものは、『論文』などの原典に示された格言とは形を異にするとはいえ、われわれの行動の指針を分かりやすい形で示すことを主眼としたものである。これらの道徳が日常茶飯いつでも心がけなければならぬ事柄であるだけに、各自の脳裏にしつかりと銘記することが先決であったのである。「最高道徳を体得せんとする人の記憶に便ならしめんがため」という配慮である。

以上、広池の道徳教育と格言とが密接な関係を有していたことを紹介したが、これらの経験が「最高道徳の格言」を編纂するにあたっての基礎となっている。

### 三、『道徳科学の論文』第二巻の成立

「格言」の考案とその変遷

漢字八文字から成る「最高道徳の格言」が考案され、体系的に編纂されるまでには多くの試行が繰り返されて

第一項 最高道徳の根本原理  
 第二項 最高道徳の根本原理  
 第三項 最高道徳の根本原理  
 第四項 最高道徳の根本原理  
 第五項 最高道徳の根本原理  
 第六項 最高道徳の根本原理  
 第七項 最高道徳の根本原理  
 第八項 最高道徳の根本原理  
 第九項 最高道徳の根本原理  
 第十項 最高道徳の根本原理

第一項 最高道徳の根本原理  
 第二項 最高道徳の根本原理  
 第三項 最高道徳の根本原理  
 第四項 最高道徳の根本原理  
 第五項 最高道徳の根本原理  
 第六項 最高道徳の根本原理  
 第七項 最高道徳の根本原理  
 第八項 最高道徳の根本原理  
 第九項 最高道徳の根本原理  
 第十項 最高道徳の根本原理

「最高道徳の格言」の草稿

いるが、それは文章の推敲であると同時に、広池自身の精神的な葛藤の過程でもあり、また心境の深まりによるものである。現在残されている格言の草稿は十四種あるが、各草稿に書き込まれた夥しい推敲の筆は、第二巻の編纂にあたっての苦心の跡を物語っている。（次頁「草稿」の写真参照）

これらの草稿を子細に見ていくと、格言の内容が微妙に変化していることに気付く。このことは広池自身も論文の中で言及している。たとえば、現行の「開発人心完成品性（人心を開発して品性を完成す）」の格言は、はじめ「救済人心而積陰徳（人心を救済して陰徳を積む）」であったのが、「救済人心完成品性」と改訂され、さらに「救済」が「開発」と改められて確立したものである。その理由は、「陰徳を積む」という動機に基づいた人心の救済では、いまだ自己の欲望の範囲を脱していないということ、さらに人心の救済とは「自己の過去における贖罪」であり、また神・聖人の意志を祖述するものであって、その努力の結果が「過去における自己の過失および罪惡に対して差し引きし、その残るところの善の分量が自然に自己の陰徳となる」のであって、陰徳を積むということは人心の救済すなわち道徳実行の動機としては不十分であったとしている。そして、さらに「救済」という語は宗教の述語であり、また「開発」はその極度に達すれば「救済」となるのであるから、「救済」を「開発」と改めたとしている<sup>(22)</sup>。このように一つの格言が確定するまでの経過は、単なる文字の推敲という作業ではなく、広池自身の心境の深まりに伴うものであったのである。このような視点から格言の草稿をみていくと、「自覚運命満足感謝（運命を自覚して満足感謝す）」という格言が「自負運命之責感謝（自ら運命の責めを負うて感謝す）」と改められたのも、また「曲尽人事而待天命（曲さに人事を尽くして天命を待つ）」が「従天命而曲尽人事（天命に従い曲さに人事を尽くす）」と改められているのも、単なる文章の推敲ではなく、そこには新たな境涯を開いたことによる格言の内容の深まりを読み取ることができる。この点については別稿として論ずることとしたい。

また、格言について、

最高道德はこれを締めれば慈悲寛大自己反省の一句に帰し、これをのばせば右の三か条（慈悲寛大自己反省・報諸大恩而培根本・救済人心完成品性）となり、さらにこれを開けば百五十条となり、ついに無限に至る。

と述べ、さらに百数十条の格言を考案したのち「これにて尽くせるにはあらず」とし、また「これで全貌を悉しておるではありませんぬ」とも述べていることからすると、膨大な数の格言を考案したのは、無限の奥行きを有する「最高道德」の内容を日常茶飯のあらゆるできごとに対応させて示そうという心のあらわれということが出来る。以下格言が体系化される過程を考察しよう。

「最高道德の格言」の形成

「最高道德の格言」が教育の場で使用されはじめたのは大正十年頃と推定される。当時は香川県本島で布教師を対象とした天理教の講習会を担当しており、その教育の場において「格言」が多用されている。このことについては次のようなエピソードがある。

広池が本島教会に招聘され春秋の二回の布教師の教育にたずさわったのは大正八年より同十二年までの間である。四・五百名の聴講者に対して、午前午後二時間づつ十日間行われた。その講義の内容は現在も謄写版刷りの冊子が保存されているが、東西の道德の歴史を語り、最新の科学の成果を織り込んだ、壮大な道德論を展開している。この講義の中で「最高道德の格言」の解説がおこなわれている。この講習会について教会長片山好造の伝記に次のように述べられている。

この教師教育は非常に効果的であつた……教師（布教師）たちは、道德観の歴史はどうあろうと、博士（広池）の信条たる左の文句は全部暗記し、それを縦横無尽に解釈するようになっていた。「慈悲寛大自己反省」・「順応同化絶対服従」・「忠誠努力して要求せず」・「人心を救済して陰徳を積む」。無学と思つていた教師が本島の講習会を受けて帰つて来ると、こんなむずかしい文句をスラスラと述べ、その上にそれを解釈する。それは確かに信者を心服さすに充分であつたらうし、社会の学者層の前に出て堂々と話して恥ずかしくない話だつた。

「最高道德の格言」が教育の場に応用された初期の姿を示すものである。そこで、当時書かれた資料に「最高道德」と題した次のようなメモがある（大正十年九月十七日の日付あり）。

慈悲寛大自己反省 たんのうとは真の誠、たんのうならうけとる。

精神穏和言行重厚 おだやか、おっとり、大勇。慈悲寛大自己反省の心事にておだやかになる。形の上の事にあらず

順応同化絶対服従 ならんといえははいといえ、ゆかんといえははいといえ。只ははいとはいあがるほかみちはない。

忠誠努力而不要求（忠誠努力して要求せず） よくをわすれてひのきしん、これがだい一ものだねや。

深信天理安心平気（深く天理を信じて安心平気） どのようなことでもかみのすることや、これをやまいとさらにおもふな。まことひとつの心あれば、どんな戦場お出てもあぶなげない。常に一つの理、戦場に出ても自由自在。

厚念親恩而申天孝（厚く親恩を念い天孝を申ぶ） 日々に家業という、これが第一、また一つ内々互いに孝心のみち、これが第一。二つ一つが天の理。

歡喜境遇感謝神人（境遇を歡喜し神人に感謝す）いつまでしんじんしたととも、ようきづくめであるほどに。

救済人心而積陰徳（人心を救済して陰徳を積む）なんでもでんぢがほしいからあたえはなにほどいるとも。おや心になり、どんな人をもそだてる心になること。

積善之家必有余慶（善を積むの家にはかならず余慶あり）たねをまいたるそのかたは、こえをおかずにつくりとり。<sup>27</sup>

これは天理教の教理と対応させて説いたものであり、「最高道徳」という名のもとに構成された最初のもので推定されるが、まだ体系化されるまでにはいたっていない。下段に示された天理教の教理からの引用については、各格言の内容を吟味する時に改めて論ずる。さらに、おなじく大正十年と推定される資料には、次のようにある。

最高道徳 宇宙の真理にして、世界古今聖人の実行せしところ。なかんずく天祖万世一系の基を開く。天理教のいわゆる生涯末代の理。

#### 第一根本義

慈悲寛大自己反省 たんのうは真の誠、たんのうならうけとる。

#### 第二根本義

順応同化絶対服従 ならんといえ、はいといえ。ゆかんといえ、はいといえ。ただはいはいと、はいあがるほかみちはない。

忠誠努力而不要求（忠誠努力して要求せず）よくをわすれてひのきしん。これがだい一ものだねや。救済人心而積陰徳（人心を救済して陰徳を積む）なんでもでんぢがほしいから、あたえはなにほど

いるととも。

この「第一根本義」、「第二根本義」という考えは当時の講演の主旨であり、晩年の思想に至っても広池の道徳思想の根幹をなしている。これらの「格言」は現行のものと若干の異同があるが、この十条の格言が昭和の初期には百数十条にまで増補されていくのである。

以上のような蓄積があつて、現行の「最高道徳の格言」の体系化がなされるのであるが、その体系化には多大な苦心が伴つた。そこで次に手元にある十四種の草稿を子細に見る事により、その間の経緯に目を向けていこう。格言が一つの体系をもつたものとして編纂されるのは大正十二年頃と推定されるが、その後、昭和の初期（『論文』までの五年間におよそ十四回の訂正増補が行われた。十四種の原稿の内、その主だった構成を挙げると以下の通りである。

#### ① 第一の草稿……………十七条

最高道徳発生の根本原理（三条）

最高道徳実行上の根本精神（二条）

最高道徳の要目（八条）

最高道徳究極の実行要目（一条）

最高道徳実行の効果（三条）

#### ② 第二・三の草稿……………計五十四条

最高道徳実行上の根本原理（二条）

最高道德実行上の根本精神(二条)  
最高道德究極の実行要目(三条)  
最高道德の要目(四十二条)  
最高道德実行の効果(四条)

③第四・五・六の草稿……………計六十九条  
最高道德実行の根本原理(三条)  
最高道德実行の根本精神(八条)  
最高道德実行上の根本条件(十六条)  
最高道德の主要条件(三十七条)  
最高道德実行の効果(五条)

④第七・八・九の草稿……………計八十九条  
最高道德の根本原理(二条)  
最高道德実行上の根本理由(五条)  
最高道德実行上の根本精神(二条)  
最高道德実行上の根本条件(十四条)  
最高道德実行上の重要注意条件(二十条)

最高道德実行上の主要条件(四十条)  
最高道德実行の効果(六条)

⑤第十・十一・十二の草稿……………計百六条  
最高道德の根本原理(二条)  
最高道德実行の第一根本条件(一条)  
最高道德実行の第二根本条件(三条)  
最高道德実行の帰着点(十条)  
最高道德実行の第一注意条件(十三条)  
最高道德実行の第二注意条件(二十二条)  
最高道德実行の諸条件(四十九条)  
最高道德実行の効果(六条)

⑥第十三(謄写版印刷のもの)……………計百三十六条  
第十四(旧版『道德科学の論文』第二卷)……………計百四十条(新版は百三十六条)  
最高道德の根本原理(三条)  
最高道德実行の第一根本精神(一条)  
最高道德実行の第二根本精神(五条)

最高道徳実行の根本原理及び根本精神を表現する主要事項（五条）

最高道徳実行の根本原理及び根本精神を表現する主要方法（八条）（六条）

最高道徳実行の目的（一条）

最高道徳実行上の注意条件（百十一条）（一〇九条）

最高道徳実行の効果（六条）

以上、格言の体系の柱の変遷を中心に紹介したのであるが、各項目の中の異同をみていくとさらに複雑な試行を繰り返していることが知れる。このように短期間においてその草稿がおびただしく訂正加筆されているのは、広池が、この期間に最高道徳の内容の確定に努力している証である。しかし、決してこの数年の間においてのみ考案されたものではなく、その背後には青年時代より培ってきた漢学の素養も重要な位置を占めるであろうし、また教育者としての体験や、信仰を求めての日々の葛藤、精進によってうらずけられたものであることはいうまでもない。そこで、各項目ごとの内容の変遷についてみていこう。

#### 四、「最高道徳の格言」の編纂過程

十四種の草稿の書かれた順を確定した後、大きな訂正増補の行われた六種の草稿を中心として、『論文』第二巻の編纂の過程を考察する。

最高道徳実行の根本原理

「最高道徳の根本原理」という項目は各草稿に設けられているが、最初の段階では「最高道徳発生の根本原理」となっていた。②の段階で「最高道徳実行の根本原理」と改められ、さらに④の段階で「最高道徳の根本原理」と

訂正され、『論文』に至っている。内容を見ていくと、まず、

①の段階の「最高道徳発生の根本原理」は「自覚運命満足感謝」・「深信天理安心立命」・「悟現象之理為無我」の三か条より構成されている。「自覚運命満足感謝」は「個性个体発生の原理」と目され、「深く天理……」と「悟現象之理……」は「宇宙萬有之存在及び発達の原理」と目されている。

②の段階では小項目はなくなり、「最高道徳実行の根本原理」と改められ、「悟現象之理為無我」・「自覚運命満足感謝」・「深信天理安心立命」の順となる。

③の段階もこのままであるが、④の段階で項目が「最高道徳の根本原理」と改められ、「深信天理安心立命」が新設の「最高道徳実行の根本理由」の項目に移動される。

⑤の段階で「自覚運命満足感謝」の「自覚運命（運命を自覚して）」が「自負運命之責感謝」（自ら運命の責めを負うて感謝す）」と訂正される。

⑥の一旦「最高道徳実行の根本理由」の項目に移動された「深信天理安心立命」が「深信天道（深く天道を信じ）」と訂正されて、再び「最高道徳の根本原理」の項目の最初に移される。

以上の段階を経て、『論文』第二巻第二章の三か条の格言が確定する。

最高道徳実行の根本精神

「根本精神」という項目も、どの草稿にも一貫してあるが、その内容は多様である。

①の段階では「最高道徳実行の根本精神」とあり、「慈悲寛大自己反省」・「目的正義手段慈悲」の二か条から成っている。

②の段階では「1. 非我為之只服之耳・2. 悟非救他只在自助・3. 以父母之心愛人類・4. 慈悲寛大自己反省」となり、「目的正義手段慈悲」が削除される。（「格言」に付された数字は、順番の確定したものを示す。以下同じ。）  
 ③の段階では「最高道德実行の根本精神」の項目のもとに大幅な増補がされている。まず非我為之只服之耳・全離物欲更無我慢・悟非救他只在自助・忠誠努力而不要求・頭上戴物敬虔服之・居尊從卑培根養徳・以父母之心愛人類・慈悲寛大自己反省・実神現神併尊崇之

の九か条のほかに「言易行易心事極難」・「精神改造適材適所」・「真理人格調和併尊」・「尚徳大於学智金権」・「尊重歴史而稽推移」・「確守秩序尊重自由」・「不結団体不認革命」などの格言が欄外に記されている。

④の段階では「最高道德実行の根本理由」という項目が設けられ、その中には従来「最高道德実行の根本原理」に入っていた「深信天理安心立命」が移行され、さらに「最高道德実行の根本精神」の中に入っていた「非我為之只服之耳」・「我非救他只在自助」・「忠誠努力而不要求」の三か条が移行され、また「最高道德実行上の根本条件」に入っていた「順応同化絶対服従」が移行されている。

⑤の段階では「根本理由」の項目は「最高道德実行の帰着点」と改められ、さらに「帰着点」を「要点」と改めている。内容は以下の通りである。

1. 深信天理安心立命・2. 順応同化絶対服従・3. 忠誠努力而不要求・4. 篤念大恩而申大孝・5. 尊伝統而心形從宜・6. 居尊敬（從↓敬）卑培根養徳（從↓敬とは「從」を「敬」に改めたことを示す。以下同じ）・7. 母意母必母固母我・8. 不破邪而移植誠意・9. 率先認善鼓舞勇貴善・10. 救濟人心完成品性

⑥の段階では「要点」の項目は、さらに「第四章 最高道德実行の第二根本精神」・「第六章 最高道德実行の根本原理及び根本精神を表現する主要方法」などの条下に移行されている。また④の段階より「第三」として設け

られた「最高道德実行上の根本精神」の条は「1. 慈悲寛大自己反省」・「2. 以父母之心愛人類」となり、⑤の段階で「慈悲寛大自己反省」を「第二章上 最高道德実行の第一根本精神」とし、「以父母之心愛人類」は「第二章下 最高道德実行の第二根本精神」の中に移行されている。⑥の段階では変更はない。  
 最高道德実行の具体的指針

この項目については夥しく統廃合がなされ、項目の名称もさまざまである。その経緯をすべて示すことは困難であるので、変遷の概略を示すに止める。

①の段階における内容は「最高道德実行の要目」として、

- (イ) 精神穏和言行重厚
- (ロ) 順応同化絶対服従
- (ハ) 忠誠努力而不要求（忠誠努力して要求せず）
- (ニ) 篤念親恩而申大孝（篤く親恩を念い大孝を申ぶ）
- (ホ) 確守秩序尊重自由（秩序を確守して自由を尊重す）
- (ヘ) 尊重人間不軽物質（人間を尊重すれども物質を軽んぜず）
- (ト) 期永久図全体之幸（永久を期して全体の幸を図る）
- (チ) 愛育他人併図自存（他人を愛育して併せて自存を図る）

の八条であるが、この項目は、後に百余条に及ぶものであり、最高道德実践の指針を示したものである。それだけに多くの試行が繰り返され、広池の最も腐心した部分である。

②の段階では「最高道德究極の実行要目」の項目は「最高道德の要目」の前に置かれ、さらに「悟言外之真理

行之」の格言が加筆される。そして、次の順となる。

1. 篤念親恩而申大孝・2. 悟言外之真理行之・3. 救済人心完成品性

「最高道德の要目」は

精神穏和言行重厚・我為之只服之耳・順応同化絶対服従・尊者譬水卑者譬火・居尊從卑尊理養徳・上主救心下主捧物・自苦勞而頌与之人・忠誠努力而不要求・尊公平而不失円満・改造精神療養肉体（↓精神肉体調和併行）・不追原因而凶善後・確守秩序尊重自由・尊重人間不軽物質・尊重団体不軽個性・期永久凶全体之幸・愛育他人併図自存・篤愛親近尽力社会・抑損自己推獎賢良・任于材智而伸驥足・全離物欲更無我慢・地位道德両者併進・頭上戴物敬虔服之・売買不爭尊重他人・自己之好惡不強他・創業守成苦勞愛他・不殺生物仁及草木・苦悶中不自暴自棄・大事能耐小事不怒・天然人為調和併用・尊學与智与道德均・尚名節而不害実利・生産消費勞資調和・大小団体主權調和・不結団体不認革命・一夫一妻結婚從理・能率必舉自他幸福・正利犧牲調和併用・大小權實自他兼行・創業守成苦勞愛人・途中困難最後必勝・半世積徳半世培之・上主救済下主捧物

の四十二条となる。

③の段階になると「最高道德究極の実行要目」・「最高道德の要目」の項目はなくなり、新たに「最高道德実行の根本条件」・「最高道德の主要条件」と改編される。「最高道德実行の根本条件」には、

1. 先造精神次造形式・2. 衆心不合則不造形・3. 動機目的方法悉誠・4. 不斷向上終身努力・5. 篤念親恩而申大孝・6. 中恩永酬小恩不忘・7. 順応同化絶対服従・8. 上主救心下主捧物・9. 悟言外之真理行之・10. 一念一行仁恕為本・11. 地位道德両者併進・12. 恢弘人道助長平和・13. 大法在心小法在形・14. 救済人心完成品性・15. 超越主義善惡併済・16. 救賢善富貴之滅亡

の十六条が収められ、「最高道德の主要条件」には、

1. 精神穏和言行重厚・2. 尊者譬水卑者譬火・3. 自苦勞而頌与之人・4. 不用政策服従真理・5. 尊公平而不失円満・6. 深沈自重熟慮断行・7. 精神肉体調和併行・8. 不追原因而凶善後・9. 確守秩序尊重自由・10. 尊重人間不軽物質・11. 尊重団体不軽個性（↓尊重個性不軽団体）・12. 期永久凶全体之幸・13. 愛育他人併図自存・14. 篤愛親近尽力社会（篤↓深）・15. 抑損自己推獎賢良・16. 任于材智而伸驥足・17. 売買不爭尊重他人・18. 自己之好惡不強他・19. 不殺生物仁及草木・20. 苦悶中不自暴自棄・21. 大事能耐小事不怒・22. 持久積微善而不撓・23. 天然人為調和併用・24. 尚名節而不害実利・25. 行大善一躍登聖位・26. 温情如春善人敬慕・27. 能率必舉自他幸福・28. 生涯消費勞資調和・29. 正利犧牲調和併用・30. 大小団体主權調和・31. 不結団体不認革命・32. 一夫一妻結婚從理・33. 大小權自他兼行・34. 創業守成苦勞愛人・35. 途中困難最後必勝・36. 豹変悉誠蛇頭龍尾・37. 半世積徳半世培之

の三十七条が収められている。

④の段階では「最高道德実行上の根本条件」・「最高道德実行上の注意条件」・「最高道德主要条件」の三項目に分けられている。「最高道德実行上の根本条件」には、

1. 先造精神次造形式・2. 不結団不認革命・3. 確守秩序尊重自由・4. 実神現神伴尊崇之・5. 頭上戴物敬虔服之・6. 先犠牲不祈願依頼・7. 有道之士敬而近之・8. 全離物欲更無我慢・9. 自苦勞而頌之于



人・10 地位道德兩者併進・11 篤念大恩而申大孝・12 居尊從卑培根養德・13 真理人格調和併尊・14 救濟人心完成品性

の十四条が収められている。また「最高道德実行上の重要注意条件」には、

1. 精神改造適材適所・2. 言易行易・3. 尊重歴史・4. 恢弘人道・5. 尚徳大於学知金権・6. 動機目的的方法・7. 不断向上・8. 上主救心下主捧物・9. 一念一行仁恕為本・10. 中恩永酬・11. 大法在心小法在形・12. 衆心不合・13. 不苦人期堅美完全・14. 悟言外之真理・15. 超越主義善惡併濟・16. 持久積微善・17. 行大善一躍・18. 不拒出金但主積徳・19. 特尊道話大小必酬・20. 救賢善富貴之滅亡の二十条が収められる。さらに「最高道德の主要条件」として、

1. 精神穩和言行重厚・2. 喜色満面威而不猛・3. 温情如春・4. 心機旺盛濟世為樂・5. 精神肉体調和併行・6. 尊者譬水卑者譬火・7. 不用政策服從真理・8. 尊公平而不失円満・9. 主調和而不辞妥協・10. 深沈自重熟慮断行・11. 不追原因而図善後・12. 不発陰微黙秘盡誠・13. 尊重人間不軽物質・14. 尊重個性不軽団体・15. 愛育他人併図自存・16. 深愛親近尽力社会・17. 抑損自己推奨賢良・18. 任于材智而伸驥足・19. 売買不爭尊重他人・20. 自己之好悪不強也・21. 不殺生物仁及草木・22. 苦悶中不自暴自棄・23. 大事能耐小事不怒・24. 天然人為調和併用・25. 尚名節而不害実利・26. 期永久図全体之幸・27. 能率必舉自己能耐小事不怒・28. 生産消費勞資調和・29. 正利犠牲調和併用・30. 大小団体主權調和・31. 一夫一妻結婚從理・32. 大小權実自他兼行・33. 偉人民衆伴敬愛之・34. 創業守成苦勞愛人・35. 身口意一致盡責任・36. 慈悲說法不恣智情・37. 途中困難最後必勝・38. 豹変悉誠蛇頭龍尾・39. 事業悉誠救済為念・40. 半世積徳半世培之の四十条となる。

⑤の段階に至ると「最高道德実行上の根本条件」は「最高道德実行上の第一注意条件」と改まり、「最高道德実行上の重要注意条件」は、「最高道德実行上の第二注意条件」となり、更に、「最高道德主要条件」は「最高道德諸条件」と改まる。この間に数条の増補がなされる。

⑥の段階になると「最高道德実行上の第一注意条件」・「最高道德実行上の第二注意条件」・「最高道德諸条件」の三項目が「最高道德実行上の注意条件」のもとに一括され、この間に三十数条の増補がされる。以下「最高道德」の具体的な内容ともいうべき最も大部な「注意条件」の諸項目が確定される。「最高道德の格言」の全容については注二十九を参照されたい。

#### 最高道德実行の効果

この項目もすべての草稿に掲げられている。まず①の段階では「1. 人心救済是真陰徳」・「2. 積陰徳是真積善」・「3. 積善之家必有余慶」の三条であるが、②の段階で、上記三か条に「4. 生万世不朽之幸福」が加筆され、③の段階で、第四条に「免疫天災更得免人禍」が加筆され、前の原稿の第四条は第五条となる。さらに、④の段階では「健康長寿開運具備」が加筆され、第五条「生万世不朽之幸福」が第六条となる。⑤の段階の原稿はこのままであるが、⑥の段階で次のような訂正がなされる。第一条として「真乎開發与救済同」が加筆され、第二条「積陰徳是真積善也」が削除される。第五条「健康長寿開運具備」の「具備（ともにそなわる）」が「共臻（ともにいたる）」と訂正される。以上の段階を経て『道徳科学の論文』第二卷第九章の内容が確定するのである。

そして、『論文』第一卷の序文ともいうべき「第一章 最高道德の諸項目の制定さるるに至りし原因及び順序」が執筆され、また「人格肉体兩者併尊」の格言が「最高道德実行の目的」の新設の項目に移される。さらに「第十章 最高道德実行の实行及び本章に於ける事実の断定に就きて」の章が立てられる。以上の経緯をもって『道

徳科学の論文」第二巻が完成するのである。このような項目の統廃合と格言の増補訂正は、すべて何らかの意味をもってなされたものであるが、これらの点については今後の課題としたい。本稿においては、格言形成の経緯と概略とその増補訂正の様子を紹介するに止める。

さらに広池の手になる格言は「道徳科学の論文」が完成した後も続けられる。たとえば「神碑第一」と称する碑文には「神の心」を示すものとして、

以天地之法則為心（天地の法則を以て心と為す）

没却自我發揚天則（自我を没却して天則を發揚す）

祖述伝統先行義務（伝統を祖述して義務を先行す）

智徳一体情理円満

慈悲寛大自己反省

悟天命而信因果律（天命を悟りて因果律を信す）

救済人心完成品性（人心を救済して品性を完成す）

順応同化絶対服従

忠誠努力而不要求（忠誠努力して要求せず）

靈肉不二万古不易

の十か条が掲げられ、また「神碑第二」には

辛苦成家後昆安之（辛苦家を成し後昆これに安んず）

積善余慶子孫得道（積善の余慶子孫道を得）

の二か条が掲げられている。このほかに未収のものが百余条あり、終始最高道德の内容を具体的な形で掲示することに尽力していることを示している。

## 五、今後の課題

以上、述べてきたことから、広池にとって「格言」は、その道德教育の要をなすものであったことが知れる。また、「最高道德の格言」の一つ一つが、広池自身の体験によって裏付けられたものであることから、我々は次の段階として、広池千九郎の生涯を通して、各格言のもつ意味を吟味しなければならぬであろう。

かつて格言をどのように使用しているか、またどの程度の頻度で使用しているかというような問題についての調査を行ったことがある。対象となったのはモラロジの講義を担当する講師であるが、その結果を見ると、まず、よく使われる格言と全く使われない格言とがあるという。重要な格言が漢字のもつイメージから使用されなかつたり、また漢字の表面的な意味にとらわれて、その内容が十分に吟味されていなかったり、いろいろな問題があるように考えられる。そこで、以上紹介してきたような格言を確定するまでの広池博士の苦心の姿を見ると、我々はまず、それぞれの格言に含有された意味の広がりや正しく知ることが必要である。八文字の漢字に広池はどのような意味を付与したのであろうか。またどのような意図のもとにその格言を考案したのであろうか。さらに「最高道德」と称する道德論のなかでその格言はどのような位置を占めるものであるか、などを十分に吟味することが重要な課題であると考えられる。「ことごとく自らの体験した事柄である」という言葉を受けて、一つひとつの格言を吟味していくことは、現代社会において「最高道德」を実践しようとする人々の必須の課題ではなからうか。そこで、各格言の持つ意味を広池千九郎の生涯を通して吟味していくことが、次の課題となる。これ

に關しては稿を改めて論じたい。(平成二年三月十五日)

〈注〉

- (1) (9) モラルサイエンス草稿 大正末
- (10) 『広池千九郎日記』第一卷
- (11) 『広池千九郎日記』第一卷
- (12) 『広池千九郎日記』第二卷
- (13) (15) モラルサイエンス草稿 大正末
- (17) 拙稿『広池千九郎とモラロジー』(『モラロジー研究』二十五号一九八八年九月)
- (18) 『麗澤大学紀要』第三十九号(一九八五年七月)
- (19) 広池千九郎遺稿
- (20) モラルサイエンス草稿 大正末
- (21) 広池千九郎遺稿
- (22) 『道德科学の論文』九 二八一—二八二頁
- (23) 広池千九郎遺稿
- (24) 『道德科学の論文』九 二八〇頁
- (25) 『道德科学の論文』九 二八三頁
- (26) 高野友治『片山好造伝』
- (27) (28) 広池千九郎遺稿
- (29) 『道德科学の論文』第二卷所収の格言

最高道德実行の根本原理

- 1、深信天道安心立命(深く天道を信じて安心し立命す)
- 2、悟現象之理為無我(現象の理を悟りて無我となる)
- 3、自負運命之責感謝(自ら運命の責を負うて感謝す)

最高道德実行の第一根本精神

慈悲寛大自己反省(慈悲にして寛大なることとなり且つ自己に反省す)

最高道德実行の第二根本精神

- 1、以父母之心愛人類(父母の心をもって人類を愛す)
  - 2、非我為之只服之耳(我これをなすにあらざして、ただこれに服するのみ)
  - 3、悟非救他而在助己(他を救うにあらざして己れを助くるにあることを悟る)
  - 4、毋意毋必毋固毋我(意なく必なく固なく我なし)
  - 5、大法在心小法在形(大法は心にあり小法は形にあり)
- 最高道德実行の根本原理及び根本精神を表現する主要事項
- 1、修天爵而人爵従之(天爵を修めて人爵これに従う)

- 2、篤念大恩而申大孝(篤く大恩を念いて大孝を申ぶ)
- 3、開發人心完成品性(人心を開發して品性を完成す)
- 4、祖先生我土地養我(祖先は我を生み土地は我を養ふ)
- 5、広開發而深救済焉(広く開發し、しこうして深くこれを救済す)

最高道德実行の根本原理及び根本精神を表現する主要方法

- 1、順応同化絶対服従(順応し同化し且つ絶対服従す)
- 2、忠誠努力而不要求(忠誠に努力して要求せず)
- 3、先犠牲不祈願依頼(犠牲を先にして祈願もししくは依頼せず)
- 4、自苦勞而頌之于人(自ら苦勞してこれを人に頌つ)
- 5、悟言外之真理行之(言外の真理を悟りてこれを行う)
- 6、地位道德兩者併進(地位と道德と兩者併せ進む)

最高道德自己の目的

人格肉体兩者併尊(人格と肉体と兩者併せて尊ぶ)

最高道德実行上の注意条件

- 1、先造精神次造形式(まず精神を造り次に形式を造る)
- 2、不破邪而移植誠意(邪を破らずして誠意を移し植う)
- 3、率先認善善鼓勇貫之(率先善を認め勇を鼓してこれを貫く)
- 4、確守秩序尊重自由(秩序を確守して自由を尊重す)
- 5、実神現神併尊崇之(実神と現神とを併せてこれを尊

崇す)

- 6、頭上戴物敬虔服之(頭上に物を戴き敬い度しみこれに服す)

- 7、主実行不道聽途説(実行を主として道に聴き途に説かず)

- 8、慈悲説法不用智情(慈悲、法を説き知と情とを用はず)

- 9、全離物欲更無我慢(全く物の欲を離れ更に我慢なし)
- 10、真理人格調和併尊(真理と人格と調和して併せ尊ぶ)
- 11、主改精神適材適所(精神を改むるを主とし適材を適所にもちう)

- 12、言易行易心事極難(言うことは易く行うことも易く心事は極めて難し)

- 13、尊重歴史而稽推移(歴史を尊重して推移を稽う)
- 14、恢弘人道助長平和(人道を恢弘して平和を助長す)
- 15、尚徳大於学智金權(徳を尊ぶこと学・知・金・權より大なり)

- 16、動機目的方法悉誠(動機と目的と方法と誠を悉す)
- 17、大小事變皆為箴戒(大小の事變みな箴戒となす)
- 18、不断向上終身努力(断えず向上して身を終えるまで努力す)

- 19、棄我即行愀然迎合(我を棄てて即行し愀然として迎

- 20、上主救心下主捧物（上は心を救うを主とし下は物を捧ぐるを主とす）
- 21、一念一行仁恕為本（一つの念いも一つの行いも仁恕を本となす）
- 22、中恩永酬小恩不忘（中恩は永く酬い小恩は忘れず）
- 23、衆心不合則不造形（衆心合せざれば、すなわち形を造らず）
- 24、不苦人期堅美完全（人を苦しめて堅・美・完全を期せず）
- 25、超越主義善惡併濟（主義を超越して善惡併せ濟す）
- 26、持久積微善而不撓（持久微善を積んで撓まず）
- 27、行大善一躍登聖位（大善を行い一躍して聖位に登る）
- 28、不拒出金但主積徳（出金を拒まず、ただし徳を積むを主とす）
- 29、特尊道話大小必酬（特に道話を尊び大にも小にも必ず酬ゆ）
- 30、救賢美富貴之滅亡（賢・善・富・貴の滅亡を救う）
- 31、精神温和言行重厚（精神温かく和らかにして言も行いも重にして厚し）
- 32、喜色満面威而不猛（喜色面に満ち威ありて猛からず）
- 33、温情如春善人敬慕（温情春のごとく善人敬い慕う）
- 46、抑損自己推獎賢良（自己を抑損して賢と良とを推獎くす）
- 47、任于材智而伸驥足（材知に任せて驥足を伸べしむ）
- 48、売買不爭尊重他人（売るにも買うにも争わず他人を尊重す）
- 49、自己之好惡不强他（自己の好惡をもって他に強はず）
- 50、不殺生物仁及草木（生物を殺さず、仁草木に及ぶ）
- 51、苦悶中不自暴自棄（苦悶の中に自暴自棄せず）
- 52、大事能耐小事不怒（大事にはよく耐え小事には怒らず）
- 53、不誇一長虚心補短（一長に誇らず心を虚しくして短を補う）
- 54、天然人為調和併用（天然と人為とを調和して併せ用う）
- 55、尚名節而不害実利（名節を尚ぶ、しかれども実利を害せず）
- 56、從習慣不異裝虚飾（習慣に従うて異装し虚飾せず）
- 57、期永久固全体之幸（永久を期して全体の幸せを図る）
- 58、能率必拳自他幸福（能率必ず拳がり自らも他も幸福となる）
- 59、生産消費勞資調和（生産も消費も勞も資も調和す）

- 34、心機旺盛濟世為樂（心機旺盛にして世を濟うを樂しみとなす）
- 35、喋黙頑柔緩急調和（喋と黙と頑と柔と緩と急と調和す）
- 36、不用政策服從真理（政策を用いずして真理に服従す）
- 37、尊公平而不失円満（公平を尊ぶ、しかし円満を失わず）
- 38、主調和而不辞妥協（調和を主とす、しかし妥協を辞せず）
- 39、深沈自重熟慮断行（深沈にして自ら重んじ且つ熟慮して断行す）
- 40、不追原因而図善後（原因を追わずして後を善くすることを図る）
- 41、不発陰微黙秘尽誠（陰微を発かず黙し秘して誠を尽くす）
- 42、尊重人間不輕物質（人間を尊重すれども物質を輕んぜず）
- 43、尊重箇所不輕団体（個性を尊重すれども団体を輕んぜず）
- 44、愛育他人併図自存（他人を愛育して併せて自存を図る）
- 45、深愛親近尽力社会（深く親近を愛して力を社会に尽くす）
- 60、勞資捧神不思施恩（勞をも資をも神に捧げて施恩を思わず）
- 61、一夫一妻結婚從理（一夫と一妻と結婚は理に従う）
- 62、胎教在積徳非教善（胎教は徳を積ましむるにあつて善を教ふるにあらず）
- 63、大小權実自他兼行（大と小と權と実と自と他とを兼ね行う）
- 64、偉人民衆併敬愛之（偉人と民衆とを併せてこれを敬し愛す）
- 65、創業守成苦勞愛人（創業にも守成にも苦勞して人を愛す）
- 66、身口意一致致尽責任（身口意一致して責任を尽くす）
- 67、途中困難最後必勝（途中には困難ありて最後には必ず勝つ）
- 68、豹変悉誠蛇頭龍尾（豹変誠を悉し蛇頭に於て龍尾に於て）
- 69、不作惡備陰徳為念（悪しき備を作らず陰徳を念となす）
- 70、事業悉誠救済為念（事業誠を悉し救済を念となす）
- 71、盛時不驕衰時不悲（盛時には驕らず衰時には悲しまず）
- 72、言行無贅累積成徳（言にも行いにも贅なく累積して徳を成す）

- 73、一切行動掃完救済（一切の行動救済を完うするに帰す）
- 74、形苦心喜徹底発光（形は苦しみ心は喜び徹底して光を発す）
- 75、半世積徳半世培之（半世は徳を積み半世はこれに培う）
- 76、省無用之力応需要（無用の力を省き需要に応ず）
- 77、尽誠意而不行干涉（誠意を尽くして干涉を行わず）
- 78、戒飭小人在于最初（小人を戒飭するは最初にあり）
- 79、物質有限大道無限（物質は限りあり大道は限りなし）
- 80、小技叫助大道導人（小技は助けを叫び大道は人を導く）
- 81、不交群衆不混雑沓（群衆に交わらず雑沓に混ぜず）
- 82、長短比較長余則善（長短を比較して長余ればすなわち善なり）
- 83、古死為犠牲今則否（古は死して犠牲となり今はすなわち否らず）
- 84、自期実行始思聖人（自ら実行を期してのちにはじめて聖人を思う）
- 85、不論自他全脱慾心（自他を論ぜず全く欲心を脱す）
- 86、多智却為小人所弄（多知のひとかえって小人の弄ぶところとなる）

- 87、常聴昵近兼聽大人（常に昵近に聴き兼ねて大人に聴く）
- 88、道徳犠牲非相互的（道徳は犠牲なり、相互的にあらず）
- 89、泰然聽道不顧些事（泰然道を聴き些事を顧みず）
- 90、大人不諛小人雍蔽（大人は諛わず小人は雍蔽す）
- 91、深遠信仰與科学合（深遠の信仰は科学と合す）
- 92、進策于他必負其責（策を他に進むときは必ずその責を負う）
- 93、尊寬弘但不容塵芥（寬弘を尊ぶ、ただし塵芥を容れず）
- 94、塵芥不棄隨器導之（塵芥をも棄てず器に随ってこれを導く）
- 95、尊質次量積勞大成（質を尊び量を次とし勞を積み大成す）
- 96、受下問外全不諫諍（下問を受くるほか全く諫諍せず）
- 97、他人欠点我補充之（他人の欠点は我これを補充す）
- 98、和光同塵獨立独行（光を和らげ塵を同じくし獨立し独行す）
- 99、無我心始能生良果（無我の心はじめてよく良果を生ず）
- 100、不入危邦・乱邦・瓜田（危邦・乱邦・瓜田に入らず）
- 101、殺身成仁是非正道（身を殺し仁を成すはこれ正道に）

- 102、從天命而曲尽人事（天命に従い、しこうして曲に人事を尽くす）
- 103、同類異類因緣集合（同類異類縁によって集合す）
- 104、老・幼・病者則不責之（老・幼・病者は、すなわちこれを責めず）
- 105、響応最慎故称馳走（響応最も慎む故に馳走と称す）
- 106、衛生を療病必要適法（衛り病を療するに必ず法に適當を要す）
- 107、天時地利人和一貫（天の時と地の利と人の和と一貫す）
- 108、迅速確實典雅安全（迅速 確實 典雅 安全）
- 109、非・理・法・権・天是真理（非・理・法・権・天はこれ真理なり）

以上、新版『道徳科学の論文』に取められた「格言」であるが、旧版一四〇条の「格言」から「居尊敬卑培養根本」（尊きに居りて卑きを敬い、根本を培養す）  
 「尊者譬水卑者譬火」（尊者は水に譬之、卑者は火に譬之）  
 「不結団体不認革命」（団体を結ばず革命を認めず）  
 「超越主義善惡併濟」（主義を超越して善惡併せ濟す）  
 の四か条が削除されている。

最高道徳実行の効果

- 1、真平開発與救済同（真の開発は救済と同じ）
- 2、人心救済真是積善（人心救済は真にこれ積善なり）
- 3、積善之家必有余慶（積善の家には必ず余慶あり）
- 4、健康長寿開運共臻（健康 長寿 開運ともに臻る）
- 5、免天災而更免人禍（天災を免れ、しこうして更に人禍を免る）
- 6、得万世不朽之幸福（万世不朽の幸福を得る）